高齢者大腿骨頸部骨折手術後の予後

第2報

国立福岡東病院整形外科

亀山 博 生・日 高 滋 紀

松 元 信 輔

Postoperative Prognosis of Femoral Neck Fracture in the Aged
The Second Report

by

Hiro Kameyama, Shigeki Hidaka and Shinsuke Matsumoto

Division of Orthopaedics of Fukuoka Higashi National Hospital

From July, 1983 to April, 1987, we operated on 85 cases for femoral neck fracture, and examined that how many patients lived and to what degree they obtained ADL.

Postoperative ADL was not related to age, types of fracture and operation in most patients. It was difficult to maintain the level of ADL at discharge because of complications.

At the time of this study, 22 cases were already dead, and most causes of death were malignancy, pneumonia and heart failure.

はじめに

高齢者の大腿骨頸部骨折の治療に於て早期手術・早期離床が保存的治療に比べて成績が良い事は幾多の報告で明らかである。しかしながら実際には受傷前のADLを獲得する事は合併症のある場合困難な事が多く、又たとえ歩行可能となってもその状態を維持できるとは限らない。

対象と方法

今回我々は昭和58年7月より昭和62年4月までの間に当院にて手術を施行した同骨折患者85名に対し直接検診又は電話にてその予後を調査したので報告する。

症例の内訳は表Iに示すとおりで、70才代、80才代を中心とし女性が男性の3倍弱であり、内側骨折32例、外側骨折53例の計85例であった。又調査時点で死亡していたものは85例中22例(25.8%)であった。

結果と考察

骨折型をレントゲン所見により分類し、それに対し

表1 症例の内訳

て行なった術式を示すと同時に術後のADLを棒グラフにて表示したのが図Iである。尚死亡例に於けるADLの評価は死亡直前の状態をもって行なった。内側型のうちGarden I, II型のstable typeでは螺子、コンプレッションヒップスクリュー(CHSと略す)の骨接合術を行ないADLは良効である。Garden III, IV型のunstable typeでは主に人工骨頭置換術(殆んどがBateman type)を行なっているが寝たきりの症

図1 骨折の分類と術式及び術後のADL

例が6例もあり成績は安定型に比し不良である。しかしこれら寝たきりの例の原因は低肺機能、片麻痺、痴呆などの合併症のためで一時は歩行可能となったもののその維持が困難で調査時点では寝たきりでいたものである。外側骨折と異なり内側骨折に於ては Garden IV の unstable type でも人工骨頭置換術を行なった場合早期離床が可能で安定型同様良効な ADL が得られるはずであるが、実際には合併症が大きな阻害因子となっていた。次に外側型53例について調べると、Evans Ia, Ib の stable type に於ては Ender 釘を主とした骨接

図3 死亡例の死因・ADL 及び生存期間

図2 ADL の経過

合術を行なっているが成績は良効である。Ia の寝たきりの一例は受傷前から寝たきりであり、Ib の例は杖歩行で退院したものの片麻痺の合併で寝たきりとなっていた。Evans Ic 以下の unstable type に於ても Ender 釘、CHS 等の骨接合術を行なっているが、同様の合併症による理由で ADL が左右されている傾向が強かった。しかし外側骨折では安定型に比し不安定型ではどうしても術後のリハビリが長期化し受傷前のレベルに復帰するのが困難で、たとえ合併症がなくとも安定型よりも成績が悪いと考えられる。

筆者は第71回西日本整形・災害外科学会に於ても60例の大腿骨頸部骨折の予後調査を行ない報告しているが、その60例の受傷前からの ADL の推移を調べてみたのが図Ⅱである。受傷前歩行可能であった50例が第1回調査時に42例と減少していたが今回の調査では更に36例と減少し、かわりに寝たきりや車椅子の例が増えている。この事は本骨折治療に際し一度獲得された ADL を維持する事がいかに困難を示しており、更に follow up を続けねばますます寝たきりとなるものが多くなるであろう。

図Ⅲは死亡例の検討である。85例中調査時点で死亡していたものは22例で最長2年4ヶ月、最短15日で平均8.2ヶ月であった。左端の年令のパラつきからみて年令自体が予後を左右する因子ではない事がわかる。右端に示したのは死亡原因で、()で示したのは受傷時より既に判明していた主な病名である。この()内の合併症が直接死因に結びついたものは、肺癌、肝癌等の悪性腫瘍で8例であり老衰の3例を除く残り11例は全く予期せぬ心不全・窒息・肺炎等で亡くなっていた。たとえ突然死(心不全)でも ADL 良効で2年以上生存していた例は十分満足すべき結果と考えられ、又寝たきりの例でも生存期間の長かったものは早期手術により体位変換が可能であった事が褥創・肺炎等の合併を免がれ延命につながったものと考えられる。術後1~2ヶ月以内に死亡している例の手術の是非が問題であるが、図Ⅲに示されているようにこれらの例は全て基礎疾患に肺癌・肝癌をもち、内科医の判断でも予後の見当がつかなかった例である。又同じ癌患者でも ADL 良効で比較的長期間生存している例もあり、手術時の適応決定に際し問題となる Case である。

症 例

症例(1)は81才の女性でオステオポロシスと多発性圧迫骨折にて某老人病院に入院していた患者である。トイレに歩いて行く途中に転倒し左大腿骨頸部外側骨折(Evans Ic)を受傷し当科へ転院。受傷後4日目に Ender 釘による骨接合を行なったが、術後3ヶ月目に内反変形、Pin の下降を認めた。しかし骨癒合は良効でなんとか独歩可能になったが、調査時点では家族の介助疲れや再骨折の不安から寝たきりとなっていた。

症例(2)は83才男性で心不全・腎不全にて某病院に入院中、右下肢の腫脹に気づきレントゲン検査を行なっ

図4 症例(1)のレントゲン所見

図5 症例(2)のレントゲン所見

たところ右大腿骨内側骨折 (Garden IV) と判明した。推定で受傷後 3 ヶ月経過しており陳旧例であり高度の転位があったので、とりあえず鋼線牽引を行なったところ 1%キシロカイン 10ml にて 20 秒の無呼吸が出現した。手術は延期し心機能評価のため Swan Ganz Catheter にて検査及び心不全の改善を行っていたところ、肝不全を併発し突然の吐血にて入院後 1 ヶ月にて死亡した。

結 語

本骨折治療に際し最も重要な事は合併症と全身状態の把握である。しかしながら、いたずらに手術を避けるのも全身状態の悪化につながる事になる。今後ますます本骨折が増加する事を考えると我々整形外科医だけではなく、他科の医師の協力、退院後施設の完備、家族の介助が不可欠の要素となるであろう。

文 献

- 1) Evans E.M.; The treatment of trochanteric fracture of the femur. J. Bone Joint Surg 31-B; 190-203, 1949.
- 2) Garden R.S.; Stability and union in subcapital fractures of the femur. J. Bone Joint Surg 46-B; 630-647, 1964.
- 3) 須藤容章ほか：老人の大腿骨頸部骨折に対する手術適応—全身状態からの考察，臨整外 17：671-678，1982.
- 4) Taylor G.M. et al; Complications and failures in the operative treatment of intertrochanteric fractures of the femur. J. Bone Joint Surg 37-A; 306-316, 1955.
- 5) 寺部啓介ほか：高齢者の手術適応の拡大に問題点と対策，外科 43：690-696，1981.
- 6) 山本真ほか：高齢者の大腿骨頸部内側骨折の骨折型—その機序と Garden 修正分類—，整形外科 32：339-347，1981.